



指吉之話

硯山人

指吉

昔むかし、ある所ところに一人のお爺おやさんとお婆おばさんが住んで居まりました。お爺おやさんは毎日山やまへ行いつて薪たきを取とり草くさを刈きつたりするのが仕事しごと、お婆おばさんは家に居いてお洗濯せんたくをしたり、裁縫しわざをするのが役目やくめで別段べつだんの苦勞くろうもなく不自由ふじゆうもなく至極樂しごくらくに暮くして居いりました。けれども唯々ただた一つ不足ふそくなことは此このよ二人ふたりの老人らうじんには未だいまだ二人の息子むすこもありませんでした。それで或日あるひのこと爐いろりの兩傍りょうぼうで焚火たきびをしながらお爺おやさんの云いふには

爺おやナア、婆おばさんや、私わしももう追々おひひ年としをとつて來きたしお前まへもだんく老おいぼれになつて來たが、唯ただの一人ひとりも息子むすこがないとは情なさけないナア。」と云いひますと、

婆おば、ホントニネー、せめて指位ゆびぐらの大きおほさの子供こどもでもいゝから生うまれて來きれば、何どんなに懐うちれしいか知しれや知しれないがねー」

と二人の老人が話して居たのが神様のお耳にでも入つたのか、それから暫くするとお婆さんはお腹が痛くなつて一人の男の子、然も大きさが漸つとのことで母指の大きき位な男の子が生れました。爺さん婆さんは大喜びで、指位の大ききだからと云ふので之に指吉と云ふ名を付けて、夫れは大事に育て、居りました。初めの中は始終お婆さんの懐の中に入れてられた切りで時々お婆さんの着物の襟の處から首を出したり、懐の中を駆けつり廻はつて遊んで居りました。そして大層丈夫な子で生れてから一寸も病氣になつたことがありません。唯不思議なことには、いくら乳を吞ませてもいくら食物を食べさせても少しも大きくなりません。矢張り生れた時と同じ様に何時過經つても勢の高さが母指位の大きき切りありませんでした。併も身体は此様に小さきとも指吉は中々精巧なそして活發な子供でありました。

指吉が一番好きな遊びはお爺さんと一所にお山へ新切りに行くことで、例も其時はお爺さんの懐の中に入つて、襦衣のぼたんを踏み臺にしてお爺さん

の喉の處から首を出して前の方を覗いたり、或時は後へ回はつてお爺さんの襟から首を出して後から引かれて来る馬にからかつたりするのが何よりも樂しみでありました。又山に着いてからはお爺さんのお辨當の箱の上に載つて馬の番人を仕ながらお爺さんの薪切りを見て遊んで居りました。此様にして毎日、指吉はお爺さんお婆さんに可愛かられて暮して居る中に一つから二つになり、三つから四つになり、五つになり、六つになり、七つ、八つ、九つ、十となつて、遂々二十にもなつて仕舞ひました。ソコで指吉は或日のことお爺さんお婆さんに向て云ふには

「指、お爺さんお婆さん、何ぞ私に一年の間お假を下さいまし。私は是から世界中を回はつて来ようと思ひますから」と云ふと

爺、それは、感心な事ぢや、それでは随分氣を付けてお出でよ」と許して來れる。

又お婆さんは

「一年とは随分長いね、出來ることなら成る可く早く歸つて来てお呉れよ」と云ふので、指吉は

支度をして愈出掛けることになりました。愈出掛け様とした時に爺さんは豫て用意して置いた小さな鐵砲と小さなサーベルとを下しました。又お婆さんは小さな袋に小さな丸薬を入れて
婆「お腹の痛いときには之をお呑みよと云つて下さいました。」

指吉はお爺さんお婆さんにお暇乞して家を出掛けて先づ兎も角も隣りの國へと參りました。何しろ旅と云ふことは始めてなので見るもの、聞くもの面白いものばかりで足の疲れも忘れて其處此處と歩るき廻はつて居りましたが、其中に日は夕方に近くなつてお腹は飢いて来る、足はくたびれて来ましたので、とある宿屋へ入つて

指「モシ、番頭さん、私を宿めて下さい。」と云いました。今しも帳場格子の中で頻りと帳面に何か書いて居た番頭は

番「へい、入らしやいまし、オイ誰か居ないか? お客様御案内だよ」と云ひながら筆を措いて店先を見た處が、是は驚いた、今確かに聞いたと思ふお客様が見えない番頭は目をキョロ／＼しなが

ら

番「ハテナ、變だぞ、確かにお客様が入らしたに違ひないが、ソレトモ自分の早耳だつたかな?」と獨り言を云つて居る。番頭に呼ばれて出て来た宿屋の下女は番頭の一人言を聞いて
下女「イヤナ番頭さんだね、お客様も来ないので人を呼んでさ、そして獨り言など云つて居る。」と云ひながら下女はドシ／＼奥の方へ行かうとする、不思議、人の影も見えないのに

逆「モシ、お客様は茲に居るよ、敷居の上に居るよ」と云ふので、能く／＼見ると成る程母指位の小人が一人小さな鐵砲と小さなサーベルとを持つて立つて居たので、番頭と下女とはオヤ／＼／＼と云つたさき暫くは開いた口が閉がりませんでした。併し何しろ是でもお客様には違ひないので番頭は早速下女に云ひ付けて盥に水を汲ませて小さなお客様の足を洗はせ、小さな三疊敷ばかりなお座敷を掃除させて通させました。かれこれして居る中に御飯の仕度が出来て下女がお膳を持つて来ましたが困つた事にはお箸もお茶碗

もあたり前の大人の遣ふもので指吉には逆も持てません。お碗の中には甘いしいお汁が入つて居りますけれど指吉には背が屈させません。仕方がありませんからお膳のふちへ乗つてお茶碗の御飯を食へては驅け下りてお皿の處へ行つて例の小さなサーベルを抜いてお魚を切つて食へたり、かまぼこを切つて食へたりして居りました。フト向ふを見ると黄色いきんとんの山が甘まさうにうづ高く積んであります。指吉は早速之へ飛んで行つて大きな甘まさうな栗を目がけてサアベルをツブリと突き指しました。さて持ち上げ様とすると動かばとぞ。突き指したサアベルが折れる位に曲つてもまだ動きません。ソレハ其筈です、栗の大きさは指吉の身体よりも大きい位なのですもの、仕方がありませんから指吉は思ふさま栗の角の所へ噛みついて少し計り食ひかきました。其中に下女が來ましたので漸つとのこと食へさせて貰つてお仕舞に致しました。

順がて夜も更けて寝る時になりましたが指吉に都合のよい布団がありません。そこで宿屋の娘はお

雛様の箱から人形の夜具を出して貸して呉れましたので之に寝ることに致しました。朝になると宿屋の娘の千代野さんと云ふ娘は面白がつて指吉の處へ遊びに來て種々なお話を致しました。そして朝飯は千代野さんと一所にお雛様の道具で食べお茶道具もお雛様のを借りることにしました。朝飯を仕舞ふと千代野さんは學校へ行く仕度してやつて來て

千代野さん「私は學校へ行つて來ますから今日は宿まつて入つしやい、歸つて來たら又お雛様でつこして遊びませうぬ」と云つて行つてしまひました。

指吉は暫く後見送つて居りましたが何を考へたか不意に表へ驅け出して今しも千代野さんが靴を穿いて居る暇にそうと千代野さんの袂の中へかくれてしまひました。順がて學校へ行つて見ると澤山の生徒が廣い運動場で鬼事やら驅つこやら色々な事をして遊んで居りますので指吉はウツカリ歩かせん。そこらにウロ／＼して居様ものなら何時踏まれて仕舞ふか判りません。一生懸命袂の中に

つかまつて居りましたが時々千代野さんが驅け出した
りたり手を振つたりする度に袂が揺れて指吉は今
にも落ちそうになつたことは一度や二度ではなく
其度に二つとない肝を幾度もつぶしそうになりま
した。

其中にお稽古の始まる如らせがチリン〜と
鳴ると澤山な生徒は直に例の通り運動場に整列し
て先生の出て来るのを俟つて居ます。指吉は此間に
にソツト千代野さんの袂から抜け出して運動場の
隈の塀の柱の根下にかくれて居ました。頓がて先
生が大勢出て来るのを見ると嚴めしい恐い顔した
ひげむぢやの校長先生やら始終にこ〜して居る
唱歌の先生迄ズラリそこへ並ぶとひげのない細い
身体の体操の先生が黄色い聲を出して

「指吉を付け！」と號令を掛けると其聲のおしま
いになるかならぬ中に又運動場の隈の方から指吉
が

「指吉を付け！」と眞似をしました。体操の先生
は指吉の居ることは知らないものですから

「教誰ですか、先生の眞似をするのは、號令の眞

似などしてはいけません。」と云ふと、
指吉の眞似などしてはいけません。」とまた誰
か眞似をしました。先生は大層怒られて
「教誰ですか、今また眞似をしたのは？」と云は
れましたが、誰れだか一向判りません。

其中に時が経ちますので

「教前へ進め！」と云ふ號令を掛けると、また
指吉小さな聲で「前へ進め」と云ふのが聞えました
スルト先生は

「教何うも變だ。何でも此邊に違ひない。」と云ひ
ながら指吉の居る所を頻りに探して居ましたが何
にも見付かりません。其中に生徒は教場に入つて
しまひましたので指吉も宿屋へ歸へつて仕度をし
て此處を出立することにしました。だん〜行つ
て或村はづれに來ました所が向ふから一人の農夫
が馬に薪を背負はせて來ましたが、何うしたのか
農夫は急にお腹でも痛くなつたと見えて倒れて
しまひました。指吉は驚いて耳のそばへ驅けよつ
て

「指モシ〜お前さん、何うかしましたか？」と

聞さすすと、

農「ア、いたた、お腹が痛い〜、」と云つて居ます仕方がありませんから指吉は

指「お前さんの家は何處だね、馬を居けておして家へ知らせて上げるから待つて御出なさい。」と云ひましたので農夫は

農「有りがたう御座います。何うぞ願ひます。」と云ひながら目を開いて見ましたがオヤ誰も居ません。

農「ハテ變だな、今茲に誰か居た様だつたが？何うしたんだらう？」と不審がるのも無理はありませぬ。

指「若し〜、お農夫さん、僕は茲に居ますよ、貴君の耳の處に居ます、と云ふ聲に驚いて能く見れば背の丈一寸五分ばかりの小人が立つて居ましたので百姓は喫驚仰天、お前さんかへ今私の馬を引いて行つて遣らうと云つたのは？」

指「さうさ、私さ、お前さんがお腹が痛くて歩けないと事ふから家へ知らせて上げ様と思つたのさ〜」

農「けれど、お方さん、そんな小さな身体では馬は引かせんよ」

指「處がさうでない。私を馬の耳の處へ乗せて呉れ、私は一人で馬を指圖するよ。」と云ふので百姓は大悦び早速指吉を馬の頭の處へ乗せて道を行く能く教へて呉れて自分は草の上に寝て待つて居ました。指吉は馬の耳の所で

指「ハイ〜、ド〜、」コラ子供、あぶないぞ」などと叫びながら馬を驅つて行きました。道行く人や子供などは驚いて

女「オヤ、あの馬を御覽よ、馬子が居ないよ、そして「ハイ〜、ド〜」なんて云つてるよ、誰が云ふのだらう？」と不思議に思つて目を圓くして居ました。指吉は田圃道を通り藪の蔭を抜けて、トある谷間の百姓家の前迄來ました、スルト家の中から出て來た女房さんは

女「オヤ〜、黒が一人で歸へて來てお父さんが見えないが、何うしたんだらう？」

指「モシ〜、お女房さん、お動さん所の人はずいぶんお腹が痛いつて寝て居るから私が馬

丈連れて来たのだよ」と云ひましたがお女房さんには聲ばかり聞えて一寸とも見えませんので、目をキョロ／＼しながら、

「おナニ、家の人がお腹が痛い？、ソ、ソリヤ大變だ！、だがお前は誰だへ隣の重太さんか、ソレントモ瀬戸の権さんか、私にはさつぱり見えやせん。」と云ひながら目を幾度も／＼こすつては見て驚いて居ました。

「お女房さん、そんなに驚かなくてもいいよ、僕は馬の耳の處に乗つてゐる、小人だよ」と云はれて始めて見れば、成る程一人の小さな小人の軍人！お女房さんは二度びつくり、さもたまげましたと云ふ顔付で頻りと指吉を見つめて居りました。が、頓がて気が付いて大急ぎで薬を探して町はづれ指して驅けて行きました。其中に指吉は手綱を傳はつて下りて来て椽端の柱に馬を結び付けて何處ともなく行つてしまいました。

だん／＼行つて或王様の國の都に來ました所が生憎其日は朝から大變な大風で町の中はほこりが一杯で逆も目もなにも開いて居られませぬ、方々の

家では半分戸を閉めて道行く人は帽子や襟巻を吹き飛ばされぬ様に一生懸命手で押へて歩いて居ました。唯の人でさへ是ですからたまりませぬ。

指吉はうつかりすると吹き飛ばされそうです。風がブューと吹いて來るが早いか其處等にある木でも草でもしやにむにかざりついて漸く免がれると云ふ譯でした。其中にゴーと云ふ凄しい音がしたかと思ふと町の向ふの方から砂ほこりを眞黒に卷き上げた風がブューツと吹いて來て「アツ」と云つて居る間に指吉は空高く吹き上げられてしまひました。暫くは雲の間をあらちらと吹き飛ばされて居ましたので指吉の眼は眩み耳は鳴つて氣が遠くなつてしまひましたが、其中に風の力が弱つて指吉は或御庭のなかに落とされました。幸に何處にも怪我はしませんでしたので起き上つて

「ア、ア、ひどい目に合つた。も少しで死ぬところだつたがまあ仕合せに能く助かつたもんだ、と獨り言を云つて居ると何處からともなく一人の御役人が肩には金モールの付いた嚴しい洋服を着けたのが頻りとキョロ／＼しながら

役誰だ？今何か云つたのは、茲には誰も体ない筈だが？怪しからん奴だ」と大層怒つて居るらしいので指吉は

指「ア、モシ、此處は何處ですか、誰れの家ですか？」

役「オヤ、また云つた誰だ？今何か云つたのは？何處に居るんだ？此茲が何處だか判らぬ奴があるか？此處は王様の御庭だぞ、ぐづぐづ云つて居ないで早く出て来ないか、何處に居るんだ？」

指「何處に居たつていゝやい。風に吹き飛ばされて来た指吉だ。王様にさう云つて御馳走の支度でもしろい。」と云ふ所を能く々々見ると山吹の木の下に一寸坊師の軍人が立つて居たので役人はびつくり

役「ヤア、是は珍しい、定めし王様が御祝びになるだらう」と云ひながら手を出し指吉を摘まうとしました。摘まられては堪りませんから指吉は大急ぎで飛び退きながら、例の小さなサーベルを抜いて役人の指をブツリ

役「アイタ、アイタ、何をす？此一寸坊師め承

知しないぞ」と怒りました。そして大急ぎで外の役人の所へ云ひ付けに行きました。スルト上役だの下役人だのと云ふ役人どもが「ナニ一寸坊師其奴は珍しい、行つて見ろ」と云ふ騒ぎで王様の御庭は急に見せ物場見た様になりました。此騒ぎが王様に聞えしたので王様は

王「コレ、庭の中で何を騒いで居る？」と御仰せになる。役人どもが是々彼様ぐで御座いますと申上げると

王「夫れは近頃珍しい。是へもて」と御仰せになる。けれども摘まぬ譯にも行きませんから役人が手を出して

王「サ、一寸坊師さん！王様の御召だよ、是れへ御乗りなさい」と云ふと

指「王様の御召！よし／＼夫れでは行つてやらうが途中で落してはいけないぞ、それから手を握るとサーベルで突く突くぞ」と云ひながら役人の手の上に乗りました。役人は王様の所へ行つて御目に掛けると

王「是は面白いのだ」と云ふ譯ではから指吉は

御殿の中に暫く逗留することになりました。半年ばかり経つ中に此國の王様と隣りの國の王様と戦をする事になりました。

そこでこちらからも兵隊を繰り出し向ふからも軍隊を繰り出して國境の戦場で幾度も戦しましたが一向勝負がつかせせん。或日のこと指吉は王様の前へ行つて申しますには

「指、私が是から敵の陣屋へ行つて敵の様子を見て参りませう。」と云ふと王様は大層お悦びになつてわざと一疋の百姓馬にきたない鞍を置いて夫れには人を乗せず、馬の耳の所に指吉を乗せて遣りました。敵のものは之を見て

甲「なんだ、此馬のきたないことは？」と云つて馬鹿にして居ましたが誰一人捕まへ様ともしなければ、勿論指吉の乗つて居ることなど見付けるものはありませんでした。

其中に指吉は充分に敵の様子を見て置いて味方の方へ歸つてしまひました。夫れから王様の所へ行つて詳しく敵の様子を申上げましたので其翌日は大變な大勝で敵はさんぐに負けて逃げて行つて

しまひました。王様は指吉のお蔭で戦に勝つたので歸つてから大層御悦びになつてお褒美には何でも指吉の望むことを叶へて遣らうと仰せられました。指吉は

「指、何もほしいものも御座いませせんが國に老人二人残して置きましたから、何うか是を呼んで遣つて一所に安樂に暮したう御座います」と申上けます。王様は夫れは易い願いだ」と仰しやつて早速澤山な兵隊に指吉を守らせてお爺さんお婆さんを迎へに遣り永く三人を御殿の中に置かれて一生安樂に暮しましたとさ

めでたし~~~~~

